

京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅱ

平成20年度調査の概要

御所市教育委員会

例　　言

1. 本書は平成 20 年度に御所市教育委員会が御所市大字本馬・茅原・玉手・條・室ほかで実施した京奈和自動車道建設に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 現地調査は、濱　慎一・岡田圭司・佐々木健太郎・西村恵子・米田裕貴子（以上、御所市教育委員会 嘴証）が各調査地区を担当し、木許 守（同 技術職員）が全体を統括した。また、調査期間中、同文化財係長 藤田和尊の指導・協力があった。調査地区担当は、以下のとおりである。
 - A 東区本調査（樅原市観音寺、平成 20 年 6 月 4 日～平成 20 年 9 月 10 日）：濱
 - B 区本調査（御所市本馬ほか、平成 20 年 6 月 2 日～平成 21 年 1 月 30 日）：米田・濱
 - C 区試掘調査（御所市茅原、平成 20 年 5 月 23 日～平成 20 年 9 月 5 日）：岡田
 - C 区本調査（御所市茅原、平成 20 年 8 月 5 日～平成 21 年 3 月 6 日）：岡田・西村
 - D 区試掘調査（御所市玉手、平成 20 年 9 月 16 日～平成 21 年 1 月 28 日）：濱
 - E 区試掘調査（御所市條・室、平成 20 年 6 月 9 日～平成 21 年 2 月 27 日）：佐々木・西村
3. 遺構写真・遺物写真是各調査担当者が撮影した。
4. 本書の執筆分担は、目次に示した。編集は各項目ごとに執筆担当者が行って、全体を木許が調整した。

目　　次

例言

目次

1) 調査に至る経緯と経過（木許）	1
2) A 東区本調査の概要（濱）	2
3) B 区本調査の概要（米田）	3
4) C 区試掘・本調査の概要（岡田）	6
5) D 区試掘調査の概要（濱）	8
6) E 区試掘調査の概要（佐々木・西村）	10

報告書抄録

表紙・裏表紙写真
B 区 住居 1
西から

1) 調査に至る契機と経過

平成 19 年 4 月に、国土交通省近畿地方整備局 奈良国道事務所長から、京奈和自動車道「御所区间」について、埋蔵文化財発掘調査業務にかかる「委託申込書」が提出された。これと前後して当市教育委員会は関係機関と協議・調整を重ね調査の分担地区を決めたうえで、これを受託した。平成 19 年度は、A 区・B 区の試掘調査から開始し、A 西区について本調査を実施した（図 1）。

平成 20 年度は、この時の試掘調査の結果を受けたものとしては、A 東区と B 区の本調査を実施した。A 東区は 840 m²を調査した。B 区は当初は約 2,800 m²を本調査対象としたが、実際に発掘してみると試掘調査では予見できなかった遺構の広がりが確認でき、最終的に市道の取り回しなどを行って約 4,000 m²を調査した。

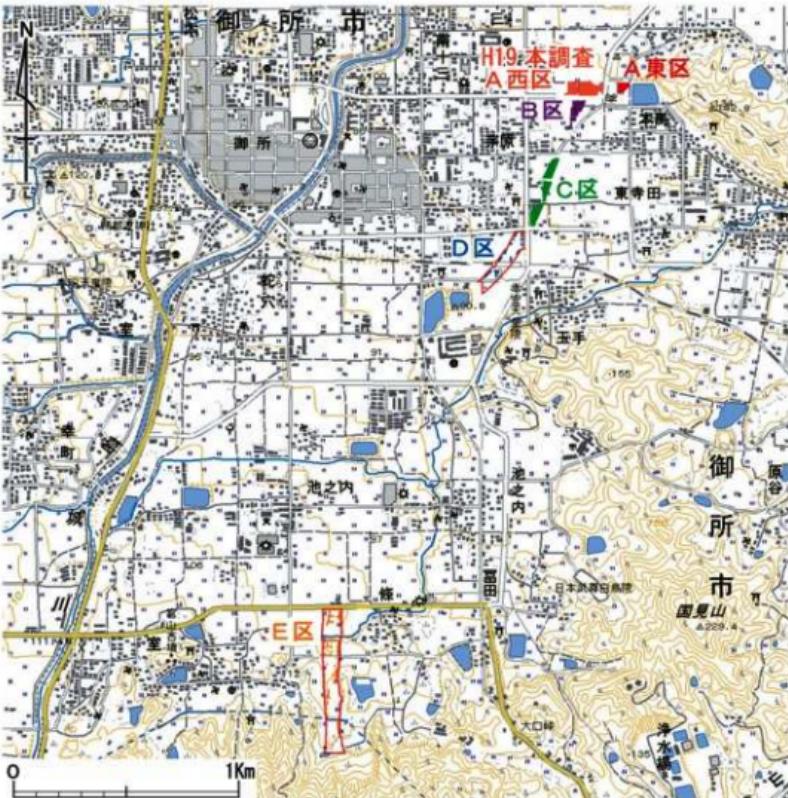


図 1 調査区位置図 (S. = 1 / 25,000)

C区は路線の面積 16,000 m²程が対象になるが、当初は、試掘後に本年度は 2,000 m²程を本調査する予定であった。しかし、諸般の事情でこの地区は調査終了が急がれるという要望があったので、試掘調査によって、最終的に約 8,600 m²の本調査対象地を決め、これを実施した。D地区とE地区は試掘調査のみを実施した。トレンチの総面積は、それぞれ、1,725 m²と 4,000 m²である。

各地区的地名および調査期間については例言に記したので参照されたい。

2) A東区本調査の概要

A東区の本調査は、平成 19 年度の試掘調査の結果に基づき、まず弥生時代中期の遺構面を対象とした。また、下層遺構の存否を確認するため、トレンチ調査を行った。

上層遺構面 上層遺構面では、弥生時代中期の方形周溝墓 2 基、土坑 3 基、溝 3 条を検出した。また、同一面で、13 世紀初頭の曲物を用いた井戸 1 基（写真 1）、ピット 2 基、杭 3 本を検出した。

方形周溝墓 1（写真 2）は、長辺の長さ約 13 m、短辺の長さ約 11 m を測る。周溝は断面形が U 字形を呈し、幅 1.3 m～3.5 m で、深さは 51 cm～93 cm を測る。方形周溝墓 2 は、調査区の南端で墳丘と周溝の一部を確認した。これらの方形周溝墓の検出面には、上記のように 13 世紀初頭の遺構があり、この時までに埋葬施設は削平されていた。

土坑は 3 基を検出したが、その中でも土坑 1（写真 3）からは多量の弥生時代中期の土器が出土した。土坑の形状は長径 160 cm、短径 98 cm の不整椭円形を呈し、深さは 39 cm を測る。この土坑中には、破碎された土器片とともに、焼土が入り込んでおり、近辺で土器と火を使用した後に、この土坑へ廃棄したものであると考えられる。

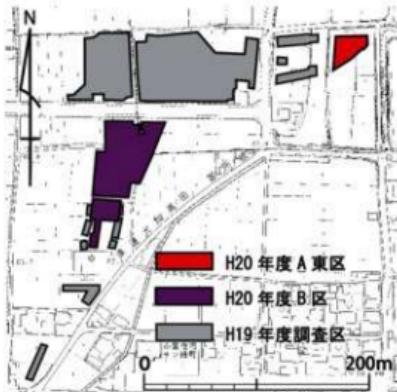


図 2 A・B 区調査地配置図 (S. = 1/5,000)



写真 1 井戸 1（南から）



写真 2 方形周溝墓 1（北から）

この調査地の北西に位置する、樋原考古学研究所が調査した京奈和自動車道関連遺跡親音寺II区でも、同時期の方形周溝墓群が検出されている。今回、A東区で検出した方形周溝墓は、この方形周溝墓群の一部であると考えられる。

下層トレンチ 下層調査のトレンチは、調査区の西と北に設定し、現地表面から約3.5mの深さまで掘削した。このトレンチでは、周辺の

調査で確認されている縄文時代中期から晩期に対応する土層を検出したが、遺構・遺物は認められなかった。



写真3 土坑1（北から）

3) B区本調査の概要

今次調査では遺構面を2層確認し、上層で弥生時代、下層で縄文時代晩期中頃の遺構を検出した。
上層遺構面 流路・堰・導水施設・土坑を検出した。

流路は調査区のほぼ中央を南から北に流れ、下流に行くにしたがい深くなっている。護岸杭列は流路北半にみられ、場所により西岸や東西両岸などで検出された。堰は、この流路に直交する方向に造られており、3箇所で確認できた。

写真4は、そのうち南側で検出した堰で、木樋を用いた導水施設を伴っており、流路の東側に水を引いたと考えられる。検出した木樋は、一本を割竹形に加工したもので、残存長約120cmであった。写真5の堰は、その北側で検出したもので、木樋は検出されなかつたが、堰の南の流路幅が広くなる地点で西方向に延びる杭列を検出した。この杭列が、元は木樋を固定したものと考えると、本来は導水施設を伴っていたと考えられる。これらの木樋を用いた導水施設は、灌漑や生活用水の確保、祭祀などに用いられた可能性が考えられる。



写真4 堰・導水施設（西から）



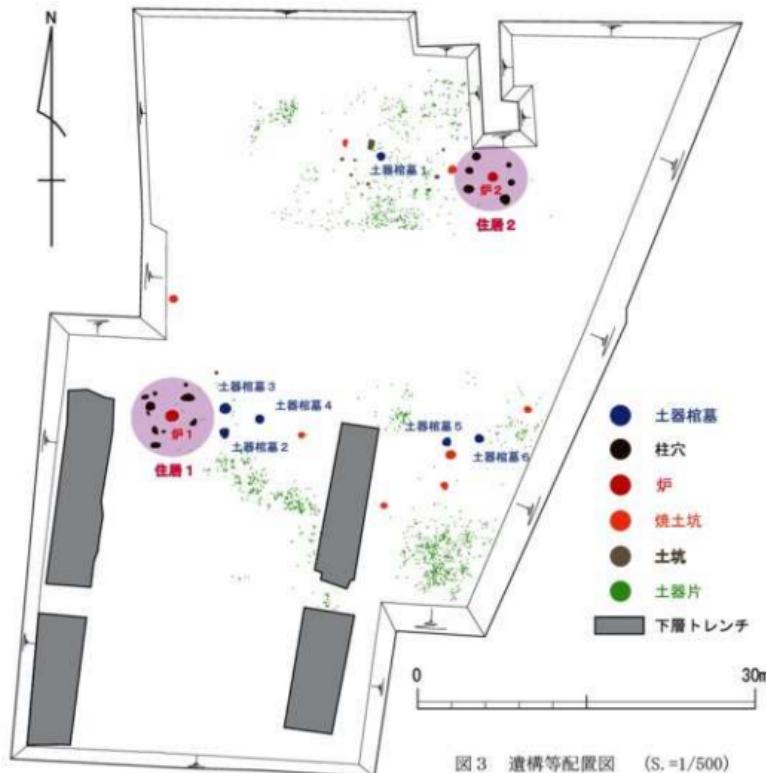
写真5 堰（南東から）

流路からの遺物は、土器・木製品が数点出土した。土器は破片のみで、時期は弥生時代と考えられる。木製品は、田下駄・ヘラ状木製品を確認した。

下層遺構面 平地住居2棟・土器棺墓6基・炉2基・焼土坑8基・土坑を確認した（図3・写真6～8・表紙写真）。

住居1（表紙写真）は、炉を中心にして10基の柱穴を検出し、半截柱を使用したことが明らかになった。その中で最大のものは、直径約50cmの丸太材を半截した柱材である。住居2（写真7）は、炉を中心に柱穴6基がめぐる平地住居であり、柱には丸太材を使用している。また住居1・住居2の柱材の表面に炭化物が付着しているものもあった。

土器棺墓は6基あり、いずれも斜位で埋設されていた。これらの土器は、ほぼ完形に復元でき、大きいもので高さ41cm、口縁径36cmとなる。



土器棺墓 1～3・5・6 は深鉢 1 個体を棺に用いたものであった。土器棺墓 4（写真 8）は、浅鉢・深鉢 2 個体の土器を同じ墓壙に用いた点で他と異なっていた。この浅鉢は全体の 1/3 程度が残っており、その浅鉢を墓壙の底に置き、浅鉢の体部内面と深鉢の口縁部付近を重ねて置かれていた。なお、土器棺墓 4 周辺の土器群から出土した口縁部片が、この浅鉢と接合できたため、埋葬する段階で浅鉢を割って設置したことが判った。

遺物は、土器・土偶・石器・漆塗木製品片が出土した。土器は縄文時代晩期中頃の縦原式が主体を占める。土器棺墓に使用された土器には、外面上部に吹きこぼれの跡があるものが存在し、日常に使用した土器を棺に転用したと考えられる。

土偶は 3 点出土し、ほぼ完形の土偶は、顔面に口とみられる表現があるのみで、性別を示す表現はみられない。両腕は欠けており、意図的に破碎された可能性も考えられる（写真 9）。下半身だけが残る土偶は股間部分に、直径約 3 mm の穿孔があり、それが体部まで続いている。その穿孔は女性器あるいは消化器官の表現とみられる。また、外面には赤色顔料が塗布されていた。今回出土の土偶は、いずれも作りが扁平で装飾のない、西日本の縄文時代晩期の土偶の特徴を備えている。

石器は、石皿・敲石・石錐・打製石斧・磨製石斧・石鐵・石錐・スクレイバー・石棒などが出土した。漆塗木製品片は、木製芯部が半輪状に残っており、漆塗りの木製輪輪と考えられる。

以上のように B 地区の調査では、当時の居住域の様相が明らかになった。平成 19 年度の調査でも同時期の遺構を検出しておらず、この一帯に縄文時代晩期中頃の集落が広がっていたことが判った。



写真 6 土器棺墓 5・6 焼土 (北から)



写真 7 住居 2 (北から)



写真 8 土器棺墓 4 (南から)



写真 9 土偶

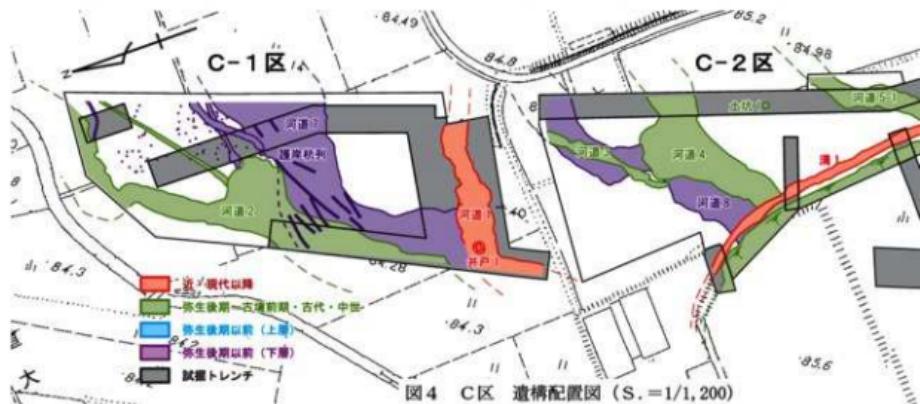
4) C区試掘・本調査の概要

C区は、当初、試掘調査として発掘を開始したが、順次、本調査対象の層位や範囲を決めていき、最終的にはこれに移行した。この際、調査区を図4のようにC-1区・C-2区・C-3区に区分した。調査区旧地形は全体に南西部が高く北東部が低い。後述のように各調査区では自然河道が検出されたが、これらはいずれもこの地形の高低差を反映して、南西から北東方向に流れている。

C-1区 床土直下層（白灰色粗砂層）上面で素掘溝と河道2が検出された。同一面にあるが、素掘溝は中世以降の時期であり、河道2は弥生時代後期を上限とする自然流路である。河道2の検出長は約80m、幅約5~15m、深さ約0.5~2mを測る。

また、その下層の青灰色シルト・明黄褐色シルト層上面では河道7が検出された。河道7は検出長約55m、幅約12m、深さ約0.5~2mを測り、弥生時代後期中頃の土器のほか、石包丁や石槍・石鎌などの石製品が出土した。注目されるのは、ここから直径約4~10cm、長さ約0.3~1.8mの護岸杭が合計約2,000本検出されたことである（写真10）。これらの杭列は、少なくとも北岸部に6条、南岸部に5条が認められ、最長約25mの列をなすものもあった。護岸施設は横木と杭を組み合わせて構成され、杭間は全体的に密であり、なかには乱雑に打ち込まれた箇所もあった。この護岸杭の北側には、弥生時代後期の柱穴群が広がっており、住居などの建物跡が存在していたと思われる。そのため護岸杭は住居域への河川の浸食を防ぐ役目も果たしていたと思われる。

C-2区 床土直下層（白灰色粗砂層）上面で素掘溝と河道3・4・5-1、溝2、土坑1が検出された。出土遺物から、河道4と溝2は弥生時代後期中頃、河道3・5-1は庄内式期を中心とする弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭頃、土坑1は11世紀末頃、素掘溝は中世以降にそれぞれ形成されたと考えられる。非常に時期幅があるがこれらが同一層に存在した。このうち特に、河道5-1は、検出長約25m、幅約2.5~5m、最深約1.2mを測り、そこから多量の、ほぼ完形に復



元できる土器が出土した。これらの器種構成は、壺、甕、鉢、高杯、小型器台、小型丸底壺など器種も豊富であり、なかには瓢形など東海系土器が見られた（写真11）。また、この遺構面の下層にあたる青灰色シルト層上面では、河道8が検出された。河道8は検出長約46m、幅約6m、深さ約1.5mを測る弥生時代後期の自然流路である。

C-3区 床土直下層（白灰色粗砂層）では、庄内式期を中心とする弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭頃に形成されたとみられる20基の柱穴、井戸4・5、河道5-2・6、土坑などを検出した。河道5-2は河道5-1に繋がるとみられ、出土土器等の数量が比較的多く、通有の土器のほかパレススタイル壺や鳥形土製品、直径0.3mの円板状の木製品などもみられた。

さらに、調査区の北東部においてこの下層（黄褐色シルト層）で水田面を検出した。その時期は層序から弥生時代後期までと考えられる。水田は幅約0.5mの畦畔で、一辺約1.7～5mに区画されているが、調査区内には検出幅約1.5mの大規模な畦畔も見られ、大小の畦畔によって調査地周辺が区画され、耕地として利用されたとみられる。

なお、以上のほか、現耕作土直下の床土上面などで近現代以降の遺構がみられた。C-1区の河道1・井戸1、C-2区の溝1、C-3区の井戸2・3である。



写真10 河道7 (東から)



写真11 河道5-1 (北東から)



5) D区試掘調査の概要

D区では、1区から4区、全ての試掘トレンチにおいて現地表面から60cm～80cm下層で、中世以降の素堀溝を検出している。その下層では、古墳時代の遺構、弥生時代の河道、水田などを検出した。水田は畦畔などの残存状況の良好な遺構面を、少なくとも上下2層を確認した。それぞれ上層水田遺構面、下層水田遺構面とするが、後述する3区1tr.南端のように、3層の水田面が確認できる地点もあった。上層水田遺構面は弥生時代中期から古墳時代前期、下層水田遺構面は弥生時代前期から中期と見られるが、出土遺物は極めて少なく、現状では時期比定は定かではない。

1区 2tr.で古墳時代前期の溝1条、柱穴25基を検出した(写真12)。特筆すべきは、この溝では少なくとも10個体以上のほぼ完形の高杯が一箇所から集中して出土したことである。周辺でなんらかの祭祀行為が行われていた可能性が考えられる。柱穴は、主軸を北西に向けた掘立柱建物に復原することができる。また、1tr.から3tr.にかけて、弥生時代中期から古墳時代前期の、西から東へと流れる河道を検出した。この河道の南岸は2tr.の北端で確認した。ただし、何度かその主流を変えているとみられ、1tr.の南端でも、護岸杭を伴う河岸を検出した。この他に河道に伴う遺構として、5tr.で平面形がL字形を呈する、木組み遺構を検出した(写真13)。これは集水橋または堰などと考えられる。1区では上層水田遺構面は確認できなかったが、下層水田遺構面に対応する層位において、4tr.で幅約1m、深さ約1mの溝、6tr.で人間の足跡を多数検出した。

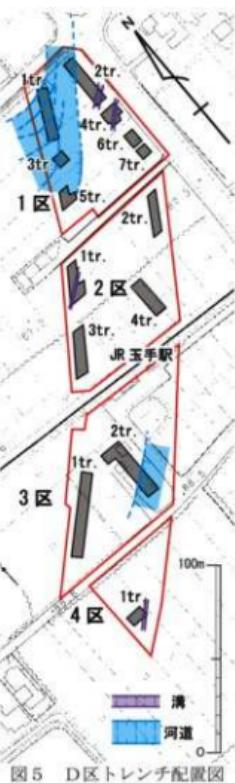


図5 D区トレンチ配置図
(S.=1/3,000)

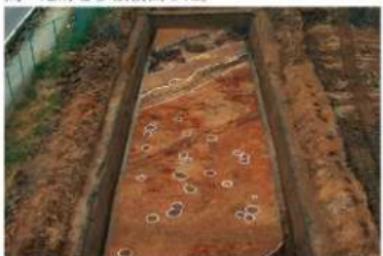


写真12 1区2tr. 柱穴群・溝(北から)



写真13 1区5tr. 木組み遺構(東から)

2区 2区では、下層水田遺構面を1 tr. と3 tr. で検出した。1 tr. では、堰を伴う南から北へ流れる溝と、溝の周囲で多数の人間の足跡を検出した（写真14）。この溝が水田に水を供給していたと考えられる。3 tr. では洪水砂層によって覆われた、一辺5.5m～6mの小区画水田を検出した（写真15）。下層水田遺構面のさらに下層には1 tr. から2 tr. にかけて、縄文時代晚期後葉（鬼塚式～船橋式）の遺物包含層が広がっていたが、試掘では遺構の検出はできなかった。

3区 1 tr. の北端では、上層水田遺構面で、一辺4m～7mの小区画水田を検出した（写真16）。1 tr. の南端では、下層水田遺構面を検出したが、この層のわずかに下位で、さらにもう1層の水田面が確認できた。2 tr. では、上層水田面を検出するとともに、2 tr. 拡張部分で、大畦畔とみられる遺構を検出した。ただし、トレチの南半部は、古墳時代前期の河道により削平されていたため、ここでは上層水田遺構面は存在しなかった。また、下層については、トレチ東辺の排水溝を兼ねたサブトレチにより、土層断面で畦畔状の盛り上がりなど下層水田遺構面の存在を確認した。

4区 4区では、上層水田遺構面で、人間などと思われる足跡を検出した（写真17）。また、下層水田遺構面对応層は、サブトレチにより断面でその存在を確認した。なお、4区の西側の土地は、用地上の事情により、発掘調査を行っていない。しかし、今次調査の結果から、ここに遺構面が広がることは確実で、状況が可能になり次第、調査の必要がある。

以上のように、D区では水田等の遺構が全体に広がっており、全面の本調査が必要である。



写真14 2区1tr. 下層水田遺構面 (南から)



写真15 2区3tr. 下層水田遺構 (南から)



写真16 3区1tr. 上層水田遺構 (南から)



写真17 4区1tr. 上層水田遺構面 (西から)

6) E 区試掘調査の概要

E 区は国道 309 号線から巨勢山まで広範囲を対象とした。このため、便宜上、道路や吉野川分水などの水路を基準に 5 つの小地区を設定し、北から順に E1 区～E5 区とした。E 区は全体が南北方向の谷地形になっているので、まず、全体地形の概要を述べ、次いで各地区ごとに調査結果を述べる。

谷地形　試掘調査の結果、南北方向の谷地形の上端が検出できたのは、西岸では E1 区 2tr、E2 区 4tr、E4 区 3tr で、東岸では E2 区 3tr、E3 区 5tr である。また、図 6 の青色のトーンで示した地点でのトレンドでは、いずれも谷埋土となる灰色砂層の分厚い堆積が確認できた。これらの点と、現地形を併せ考えると図 6 のような谷地形が復原できる。

E1 区では、一部で段を形成しながら西から東に落ち込んでいく地形を確認した（写真 18）。その落ち込みは 1tr まで続き、1tr では谷地形の埋没過程で形成された南北方向の流路を確認した（写真 19）。しかしここでは谷地形の東岸を検出できなかった。一方で E2 区 3tr で確認した東岸は現地形からみると、北側はさらに東へ広がっていくと復原できる。このようなことからこの E1 区は南北方向の谷地形の開口部にあたると考えられる。

また、E2 区南端と E3 区北端では西へ流れ込む東西方向の谷地形を検出している。

出土遺物は全体的に乏しかったが、E4 区 3tr の谷埋土（写真 20）から、土師器や須恵器、木製品など古墳時代中期～後期の遺物が出土した。ここでは南北方向の谷の西岸が検出されているので、

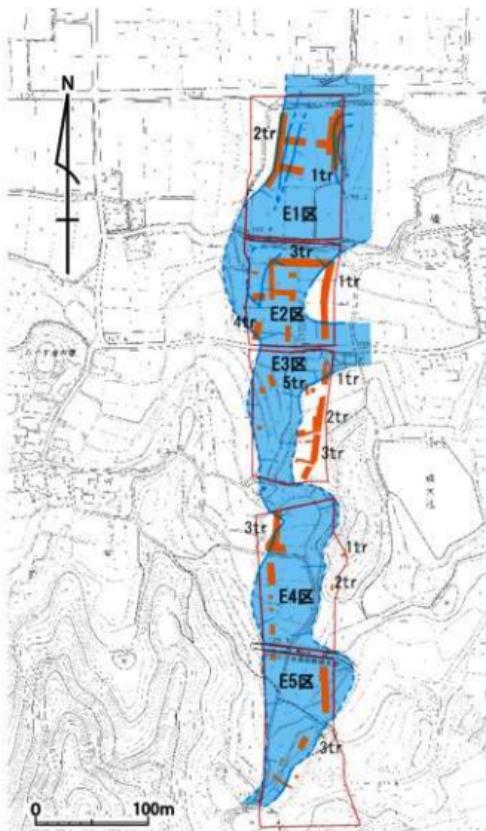


図 6 E 区 トレンド配置図 (S. = 1/5,000)



写真 18 E1 区 2tr (北から)



写真 19 E1 区 1tr (北から)



写真 20 E4 区 3tr (南から)

周辺に遺構の存在が予想されたが、調査区内に遺構は確認できなかった。出土した遺物は、巨勢山古墳群が所在する丘陵地から谷地形へ流れ込んできた遺物であると考えられる。

E2・3 区の東西方向の谷地形（写真 21・22）では、北岸と南岸の下端付近から、完形に近い弥生土器が数点出土した。また E3 区 1tr では南岸の上端に近い箇所で土師器や須恵器が数点出土した。このように、この谷埋土には残存状況が良好な遺物を豊富に含むことが判った。

E1 区 周知の遺跡である中西遺跡の範囲内に含まれるが、上記のように自然の谷地形が確認できたのみで、人工的な遺構は存在しなかった。出土遺物も極めて少なかった。

E2 区 1tr の南端で検出した東西方向の谷地形の上端からトレンチ北端にかけて遺構を検出した。現耕土直下は明褐色砂質土の地山になっており、この面で素堀構のほか、この溝に切られる古



写真 21 E2 区 1tr 全景 (南から)



写真 22 E3 区 1tr (南西から)



写真23 E3区5tr(東から)

墳時代の堅穴住居跡や土坑、ピットを確認した。住居跡は3棟を検出した。このうち1棟は、一辺約5mの方形プランの住居で、トレンチ内でほぼ1棟分を検出した(写真24)。

E3区 3trでは現耕土直下から古墳時代の堅穴住居跡を2棟検出し、このほかにも土坑、土師器が多量に出土した土器窓り、溝、ピットを検出した(写真25)。

2trでは地表面から1m以上の深さの搅乱が及んでいたことを確認した。ここで検出した遺構は、トレンチ北端で曲物を転用した井戸枠の最下段のみで、ほかの遺構は確認できなかった。井戸が地表を深く掘り下げて造られる施設であるため、その最下段が搅乱の影響を唯一免れたと考えられる。

E4区 丘陵上において古墳などの存否を確認するために、1trと2trを設定した。しかし、表土直下で地山が検出され、遺構等が存在する徴候はなかった。

E5区 E4区同様、古墳などの存否確認のために、3trを設定したが、表土直下で地山を検出し、遺構等が存在する徴候はなかった。なお、3trの南側は現地形の測量図で丘陵の先端が盛り上がるようみえる(図6)が、現代の土採掘に伴う魔石状況が確認され、古墳等の遺跡とは関係するものではないことが判った。

以上のようにE区は大部分が自然の谷地形に含まれることが判ったが、人工的な遺構は、E2区1trとE3区3trで古墳時代の住居跡等を検出した。これらの住居は、谷地形を避けて、高台となつた場所に営まれたと考えられる。来年度以降の本調査は、それらの遺構を検出したE2区とE3区のそれぞれ東半で必要である。

なお、E1区の南半には、用地上の事情により未調査地が残っている。この地点については、E2区の調査結果を踏まえれば、状況が可能になり次第、試掘調査が必要である。



写真24 E2区1tr堅穴住居跡(西から)



写真25 E3区3tr全景(北から)

報告書抄録

ふりがな	けいなわじどうしやどうかんれんいせきはくつちょうきがいほう2							
書名	京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅱ							
副書名	平成20年度調査の概要							
卷次								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第35集							
編著者名	木許守・濱慎一・米田裕貴子・岡田圭司・佐々木健太郎・西村慈子							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-2298 奈良県御所市1-3 TEL 0745-62-3001							
発行年月日	西暦 2009年3月24日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
京奈和 自動車道 関連遺跡 A区	奈良県 御所市 大字 本馬ほ か	29208		34° 27' 56"	135° 45' 14"	20080604 ~ 20080910	840	京奈和自 動車道建 設に伴う 遺跡確認 調査
同 B区	同 本馬ほ か	29208		34° 27' 52"	135° 45' 5"	20080602 ~ 20090130	4000	同上
同 C区	同 茅原	29208		34° 27' 41"	135° 45' 1"	20080523 ~ 20090306	8600	同上
同 D区	同 玉手	29208		34° 27' 31"	135° 44' 55"	20080916 ~ 20090128	1725	同上
同 E区	同 條・ 室	29208		34° 26' 32"	135° 44' 26"	20080609 ~ 20090227	4000	同上
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
京奈和自動 車道関連遺 跡A区	墓地 集落跡	弥生中期・ 中世	方形周溝墓・土坑・ 井戸	弥生土器・瓦器・木 杭	弥生時代中期の方 形周溝墓。			
同 B区	集落跡 流路	縄文・弥 生	平地住居・土器棺 墓・土坑・流路	縄文土器・弥生土器・ 土偶・石器・木製品	縄文時代晩期の平 地住居・土器棺墓。			
同 C区	集落跡	弥生後期 ~古墳	水田・溝・河道	弥生土器・土師器・ 木杭	弥生時代後期の護岸 杭を伴う河道。			
同 D区	農耕地 集落跡	縄文・弥 生・古墳	遺物包含層・水田・ 溝・河道	縄文土器・弥生土器・ 土師器・木杭	弥生時代の小区画 水田。			
同 E区	集落跡	弥生後期 ~古墳	堅穴住居・流路・ 土坑・素堀溝	弥生土器・土師器・ 須恵器・瓦器	古墳時代の堅穴住 居。			

京奈和自動車道関連遺跡発掘調査概報Ⅱ

平成 20 年度調査の概要

御所市文化財調査報告 第 35 集

平成 21 年（2009 年）3 月 24 日

編集・発行 御所市教育委員会

御所市 1-3

印 刷 株式会社 笹田印刷所

奈良県御所市今住 16-3

